

～ 恩 紡 ぎ ～

今から 28 年前、私が 21 歳の時、日本の海岸線を一人で旅をしていました。

多くの漁師さんや漁村の方々のお世話になりながらの旅です。ご自宅に泊めていただき、食事やお風呂とお世話になるばかりの旅でした。

ある時、何日もお世話になったおじさんに「明日出発しますが、受けた御恩を返せません」と言うとおじさんは「恩は返すものではないよ。次の世代へと紡いでいくものだよ、だから君もいつの日か次の世代の子に何か出来ることがあったら紡いであげてほしい。」と言って見送ってくれました。

旅が終わるころおじさんが亡くなられたと手紙をもらいました。

あの頃の自分には、おじさんの言う意味は理解できませんでした。

28 年経った現在、小学生～大学生まで様々な若者たちと関わるチャンスをいただいています。

今、おじさんと同じことを彼らに伝えている「次の世代に紡いでいってほしいと」

でも、恩を紡ぐとはやってもらったことをそのままやるのではなく、次の世代と向き合えるように自分自身を磨き上げ、自分なりの信念を持ったうえで、年下となる次の世代の人と同じ目線を見て、彼らが次の世代へ紡げることができる、ほんの少しのヒントをお互いの幸せの形にして受け取ってもらうものだと思います。

それは、とてつもなく難しいことで、とても尊い行いではありますが、結局また、自分が次世代の子達から幸せな気持ちをいただいてしまうのです。

今の若者たちをとりまく環境は、昔に比べて多様化しており、居る場所の距離が遠く離れていてもインターネットなどを介して繋がれる一方で、目の前にいる人とのコミュニケーションがうまく取れていない実情を目にします。自分のテリトリーのようなものを持っていて、その範囲内で処理しているような・・・。

したがって、多くのチャンスに出会う機会が減少し、実体験が伴わない世界観で物事を考えている節があり、その考え方は、綺麗で穢れのない桃源郷のような世界を見ているように感じてしまいます。

若者たち、子供たちの心が空洞化してしまわないか心配でなりません。

このままでいいのか？と自問自答しつつも多くの方々から受けた恩で、より多くの若者たちの心が御恩で満杯になって、そしてまた、紡いでいってもらえるよう進んで行きます。

いつの日か、恩紡ぎが織りなす人の世界を夢見て。

有限会社ドーモ
代表取締役 森田 渉